

田中城跡 散策ガイド

～徳川家康ゆかりの田中城・御成街道を歩く～



駿河国田中城絵図(市指定文化財)

■田中城の歴史

藤枝市田中にある田中城は、今川氏の時代には徳一色城と呼ばれ、土豪一色左衛門尉信茂の居館から発展したものと考えられています。江戸時代の地誌によると、今川義元の代には由井美作守や長谷川次郎右衛門正長が守将となたとされています。

永禄3年(1560)の桶狭間の戦いで義元が戦死し、今川氏の基盤が崩れ始めた機に乗じ、甲斐の武田信玄が駿河侵攻を開始しました。元亀元年(1570)、花沢城(焼津市)の落城をうけて、正長は徳一色城を明け渡し、遠江に退去しました。徳一色城を手に入れた信玄は、馬場信春に命じて三日月堀(馬出曲輪)を作らせ、城の守りを堅固にしました。徳一色城は、田中城と呼ばれるようになり、遠江に対する戦略的な拠点として位置づけられました。

信玄の死後に家督を継いだ武田勝頼は、天正3年(1575)の長篠の合戦で織田・徳川の連合軍に大敗し、その勢力図は一変しました。徳川家康は遠江・駿河にある武田方の諸城を攻略しにかり、田中城もまた徳川軍の度重なる攻撃を受けました。徳川軍は、麦や稲を青刈にする刈田という作戦をよく用いました。天正10年(1582)2月には、織田・徳川・北条氏が連携して武田領国への進撃を開始し、3月1日、ついに田中城は開城しました。

江戸時代には田中藩が置かれ、駿府の西の守りとしての重要さから、譜代大名が田中城に入り治めました。城主は12氏21代を数え、入城・転出に際して加封されたり、幕府の要職に任じられた者も多数いました。また、江戸時代後期には、藩校の日知館が城内に設立され、多数の武芸者・文学者を輩出しました。

大政奉還により、志太地域は静岡藩の領地となったため、田中藩は安房国長尾へ転封となり、藩主本多家と家臣一同は新しい領地へ移っていきました。ここで、長く続いた田中城はその役割を終えることとなりました。



二の丸配石遺構



田中城本丸櫓

■田中城主の変遷一覧表

年代	城主(領主)名	領高	主な事績・できごと
15世紀頃	(一色左衛門尉信茂)		この頃、今川氏の命を受けて居館を拡大し、徳一色城又は戸久一色城と稱したのが田中城のはじまりと伝えられる。
16世紀前半頃	(今川氏)		由井美作守が在番。
16世紀中頃	長谷川次郎右衛門正長		一族21人300余騎で守る。
1570	(武田氏)		馬場美濃守信春により三日月堀を新設。山県三郎兵衛昌景が在番し、200騎で守る。
1572	(武田氏)		依田右衛門尉信蕃が在番。4回徳川軍に攻められ、1582年大久保忠世に明け渡す。
1579	(武田氏)		依田右衛門尉信蕃が在番。4回徳川軍に攻められ、1582年大久保忠世に明け渡す。
1582	高力河内守清長	1万石	徳川氏の臣。
1590	(中村氏)	8千石	豊臣氏の臣中村一氏の家臣横田内膳正村詮在番。
1601	酒井備後守忠利	1万石	四の丸拡張、大手口・侍屋敷の整備、下伝馬場の開設。
1609	(徳川頼宣領)		1619年、頼宣肥州へ移る。
1619	(幕領)		大久保忠直・忠当、酒井兵七郎正次が在番。
1624	(徳川忠長領)		三枝伊豆守守昌、興津河内守直正が在番、1631年忠長甲斐国に幽閉。
1631	(幕領)		松平大膳亮忠重、北条出羽守氏重が在番。
1633	松平大膳亮忠重	3万石	田中城在番中に増築される。
1635	水野監物忠善	4万5千石	千貫堀を築き大井川の氾濫を防ぐ。
1642	松平伊賀守忠晴	2万5千石	
1644	北条出羽守氏重	2万5千石	1648年、機須賀城主本多越前守利長田中城在番となる。
1649	西尾丹後守忠照	2万5千石	
1654	西尾陽成守忠成	2万5千石	2才で遺領をつく。
1679	酒井日向守忠能	4万石	1681年、領地召上げにより井伊掃部頭御預、本多忠恒在番。
1681	土屋相模守政直	4万5千石	のち京都所司代、老中を勤める。遠州流の茶人。
1684	太田摂津守貞直	5万石	若年寄、朝用人を勤める。大慶寺に墓所あり。
1705	太田備中守貞晴	5万石	11才で遺領をつく。のち寺社奉行、若年寄、大坂城代を勤める。
1705	内藤藤前守式徳	5万石	
1712	土岐伊予守頼殿	3万5千石	老年のため大坂城代を辞し田中に入る。
1713	土岐丹後守頼稔	3万5千石	大井川堤普請、田中城四の堀浚渫、のち老中となる。
1730	本多伯耆守正矩	4万石	領内に法度書を下す。
1735	本多伯耆守正珍	4万石	老中を勤めたが郡上一揆で引異、罷免される。
1773	本多紀伊守正供	4万石	
1777	本多伯耆守正直	4万石	12才で遺領をつく。田中騒動で引異陽居。
1800	本多備前守正意	4万石	寺社奉行、若年寄を勤める。増田五郎右衛門の事件おこる。
1829	本多豊前守正實	4万石	1837年藩校日知館を創設、1843年大塔を建造。
1860	本多紀伊守正納	4万石	
1868	(徳川家達領)		大政奉還により田中藩は安房国長尾へ転封され、徳川家達領となる。田中城には仮城代平岩金左衛門や田中奉行高橋伊勢守精一が入る。

■御成街道

江戸時代には、田中城内へ通じる木戸口は東西南北の4つありました(東の平島口、西の清水口、南の新宿口、北の藤枝(大手)口)。そのうちの平島口から平島村・上当間村を通って鬼島村の八幡橋で東海道と合流する道のことを、御成街道といいます。これは、江戸時代ははじめまで平島口が田中城の正門だった頃、この道を通って大名・武將が行列を従えて田中城へ出入りしたことから名づけられました。

徳川家康は、晩年になって大御所として駿府城に隠居していたおり、山西とよばれた志太地域に鷹狩りによく出かけました。その際、御成街道を通過してしばしば田中城を訪れたといわれています。

初代田中藩主となった酒井備後守忠利は、藤枝宿から城内に通じる大手口を開設し、東海道と田中城を最短距離でつなげました。これにより、大手口が田中城の正門となり、平島口の城門(平島一の門)は開かずの御門となりました。これ以降、東海道から大手口を通って城内に入る道が正式なルートとして整備されていきますが、御成街道はその後も利用され、八幡橋から焼津方面へ抜けるルートとして往来する人々が多かったようです。現存する田中城絵図には「御成道」との表記が見られるものがいくつかあり、江戸時代にはこの呼称が定着していたことがわかります。絵図には、御成街道の全長は「此木戸より八幡橋迄拾六町拾間」(約1.76km)と書かれています。

御成街道は、戦前までは昔のまま、幅9尺(2.7m)の道の両側は高さ4尺5寸の土壁で固められ、松並木がそびえ立っていました。現在では、舗装道路が平島-上当間の間のたんぼのなかを走っているのみですが、街道の周辺には家康にまつわる史跡・寺社が点在しています。



平島から上当間を望む



八幡橋

■藤枝市指定史跡 田中城址(昭和32年指定)

四重の堀に囲まれた縄張で有名な田中城は、明治4年(1871)に廃城となり、その土地の多くは民有地となり姿を変えていきましたが、現在でも田中地域の道路の形状は城の縄張の名残を伝えています。堀や土壁の一部は、現在でも見ることができます。また、発掘調査の出土品は、藤枝市郷土博物館で展示しています。



二の堀

■史跡田中城下屋敷

江戸時代後期におかれた、藩主の別荘庭園である下屋敷跡は、庭園を復元し、田中城ゆかりの建物(田中城本丸櫓、茶室、仲間部屋・厩、長楽寺村郷蔵、いずれも市指定文化財)を移築した史跡公園として公開しています。また、田中城や田中藩に関するパネル展示を行っています。



冠木門・本丸櫓



藤枝市郷土博物館・文学館 〒426-0014 藤枝市若王子500 TEL 054-645-1100
史跡田中城下屋敷 〒426-0012 藤枝市田中3-14-1 TEL 054-644-3345

平成26年3月発行

■田中城の構造

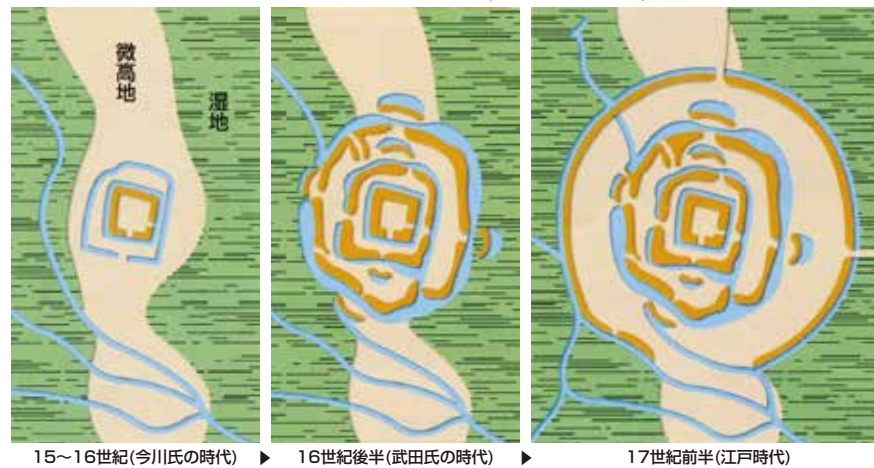
田中城は4つの曲輪(区画)と4つの堀が同心円状に配置されており、その形状から別名「亀城」「亀甲城」と呼ばれていました。城の始まりは一色信茂の居館であるといわれており、本丸・二の丸の方形の部分がこのことに由来すると考えられています。三の丸は四隅が突出しており、この形状が亀に似ているとも言われています。

武田信玄が攻略した際には既に三の丸まで存在しており、武田氏による改修で6箇所馬出しの曲輪が築かれたとみられます。そして、田中藩初代藩主である酒井忠利が、三の丸の外側に円形の堀と土壁を設けました。その内外に侍屋敷を造成し、近世田中城の基本的な形が整いました。

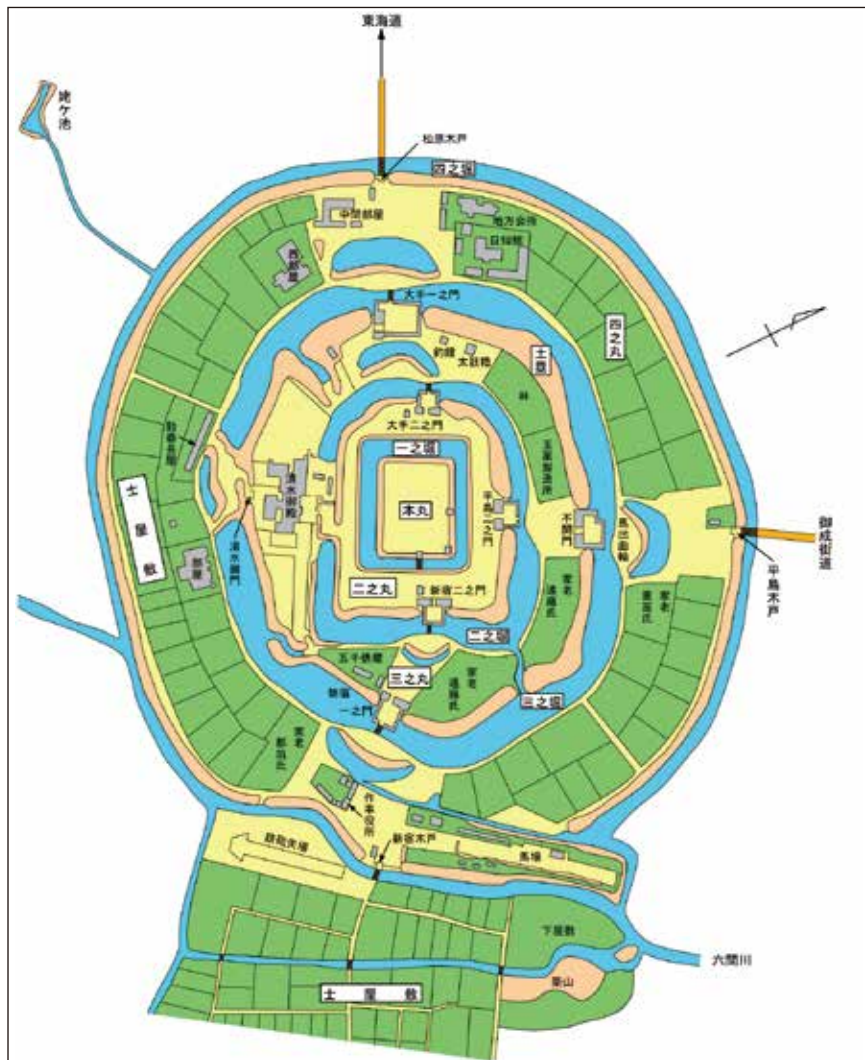
田中城には江戸後期には天守閣は無く、本丸隅の石垣上2箇所二階建ての櫓が建てられていました。また、堀はかきあげのままで、このかきあげた土で作った土壁も高く積み上げただけの素朴な築城でした。その一方で、六間川と四の堀を繋いでおり、川をせき止めることで全ての堀に水が進み文字通り浮城化する仕組みとなっており、周囲の湿地とあわせ、堅固な城でした。

田中城は、東海道の近くに立地し街道の押さえの城であるとともに、青池から発する六間川の水運により、瀬戸川から海につながる城でもありました。

※城内の曲輪の表記は、駿河国田中城絵図(市指定文化財)に準じました。



■幕末のころの田中城復原図



※「田中亀城之図(大慶寺蔵)」、「田中城内外之図」、明治時代以降の地籍図・測量図および航空写真に現れた地割などを元に復原したものです。

■田中城・御成街道ゆかりの伝説

・徳川家康と鯛のてんぷら

晩年の家康は、鷹狩りと称してたびたび田中城を訪れました。元和2年(1616)1月21日、家康は田中城に宿泊し、京都で流行しているという料理、鯛をごま油であげ、にんにくをすりかけたものを機嫌よく、いつもより多く食べました。その夜、腹痛と食あたりをおこしました。家康は、薬の服用により小康を得て、25日駿府城に帰りました。この食あたりは、疼痛を伴う臓疾患の前触れでした。

家康は医薬に強い関心と深い知識を持っており、寸白虫(糸虫)が原因と自己診断しました。そして、待医・片山宗哲の、老齢による病状の悪化を案する謀めを耳に入れることなく、常備薬のひとつで強壮薬の万病円を服用し続けました。その後、病状は回復することなく、4月17日、駿府城内にて天寿75歳をまっとうしました。死因は、胃がんという説が有力です。

・思案橋

八幡橋から御成街道に入ればらく行ったところに、かつて思案橋という橋がありました。江戸時代、東海道と間違えて御成街道を進んでしまった大名がここで考え直して東海道へ引き返したことから、この名がつけました。

・平島節

明治維新により田中藩主・本多正納は安房国長尾へ転封になりました。本多家の一行は平島口から御成街道を通り、長尾へ向かいました。そのとき平島で、付近の百姓たちは道の両側に土下座して見送り、殿様が通り過ぎる時には別れを惜しみ大声で泣いたといわれています。これ以後、平島では大声で泣くことを「平島節を唄う」というようになりました。なお平島の梅原家には、このとき殿様が置いていったという地の神様が今でも大切に祀られています。